

もしぼくが本だったら

ジョゼ・ジョルジェ・レトリア／ぶん
アンドレ・レトリア／え 宇野和美／やく
アノニマ・スタジオ

「もしぼくが本だったら「この本がわたしの人生を変えた」とだれかが言うのをきいてみたい」「もしぼくが本だったら…」という同じフレーズが繰り返され、印象的なイラストが想像をかきたてる。1ページずつ、じっくり味わって読んでほしい。さて、もしあなたが本だったら？



不登校、選んだわけじゃないんだぜ

貴戸理恵、常野雄次郎／著 イースト・プレス

学校に行かない選択をした人は自分で不登校を「選んだ」のか？ 小学校に行っていなかった著者の貴戸さんは、選んだのではなく、そうせざるをえなかったのだという。学校に行くことを「選んだ」人はいないのに、不登校は「選んだ」といわれるのはなぜか。自分の中のもやもやを言葉にして、それぞれの「不登校論」に向き合う。



ふるさとって呼んでもいいですか

ナディ著 山口元一解説 大月書店

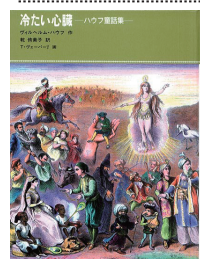
話す言葉も、食べるものも、習慣も何もかも知らない国で暮らすことになったら……。著者は6歳の頃、両親や弟たちと祖国のイランを離れ日本にやってきた。しかし家族と一緒に日本で暮らすことは、法律や文化、宗教等多くの壁が立ちはだかり、簡単なことではなかった。楽しいけれど大変な日本での学校生活の話は、身近な友達の話や聞くような親しさが感じられる。



ソングジュの見た星

リ・ソングジュ／作 スーザン・マクレランド／作
野沢佳織／訳 徳間書店

北朝鮮の平壤(ピョンヤン)から、わけあって遠く土地へ引越すことになったソングジュとその家族。新しい土地での生活は、前の暮らしとは比較にならないほど貧しいものだった。ある日、ソングジュは人が処刑されるのを見てショックを受け、見えていなかった現実と直面することになる。コッチェビ(浮浪児)として生きのび、国を脱出するまでの日々を描いたノンフィクション。



冷たい心臓 —ハウフ童話集—

ヴィルヘルム・ハウフ／作 乾侑美子／訳 福音館書店

炭焼きペーターはお金ほしさからある男に頼んで自分の心臓と石の心臓をとりかえた。石の心臓は脈打つこともなく感情さえもうばってしまった。他に「幽霊船の話」「切られた手の話」「鼻の小人」などがある。



ミイラになったブタ

スーザン・E. クインラン／著 藤田千枝／訳
さ・え・ら書房

なぜ、6000 頭以上のトナカイは絶滅したのか？
なぜ、ヒメレンジャクの尾羽はオレンジ色になったのか？
なぜ、完全な形の動物の死体をめったに見ないのか？
目に見えない自然の謎に挑戦しよう。



マリアンヌの夢

ストー／作 猪熊葉子／訳 岩波書店

10 才の誕生日に、急に病気がかかってしまったマリアンヌ。ある日、古い裁縫箱で見つけた鉛筆で絵を描くと、夢の中で絵と同じ世界に立っていた。どことなく不安な空気がただようその世界で、マリアンヌは自分が描いた少年と出会う。



アンダーグラウンド

デビッド・マコーレイ／著 田村明／訳 岩波書店

私たちは普段何気なくくらしている。けれど都市の生活に必要な電気・ガス・上下水道・地下鉄は、地面の下でどのような構造になっているのだろうか？ マコーレイによる文と緻密なイラストによって、その全貌があきらかになっていく。

グリーンノウの子どもたち

L. ボストン／著 亀井俊介／訳 評論社

7 歳のトーリー少年は、冬休みを大おばあさんの屋敷で過ごすことになった。その古い家でトーリーは、不思議な笑い声や足音を聞く。それは、300 年も前の子どものものだった。次第にトーリーは、子どもたちの姿を見るようになる。



聊斎志異

蒲松齡／作 立間祥介／編訳 岩波書店

ある日、譚玄が座禅を組んでいると、耳の中でかすかに「会おうか」という声がある。別の日、また声があるので「会おうか」と答えると、耳の中から夜叉のような顔をした小人がはい出てきた。それを見ていた譚はやがて気が狂ってしまった。この「耳の中の小人」の他、中国の不思議な物語が 30 話おさめられている。

